



聖徳太子摂政像〈楊枝御影〉(南北朝・四天王寺)

「絵伝」から聖徳太子を知ろう

— 愛したいし・愛されたいし —

聖徳太子といえば、推古天皇の摂政として政治に携わり、冠位十二階や憲法十七条を制定し、遣隋使を派遣して外交を展開したと同時に、仏教興隆に力を尽くし、多くの寺院を建立し、「三経義疏」を著したなどというように、誰しもその功績について、何かは話すことができる「歴史上の偉人」です。

誰もが何かを語るができる存在であるということは、聖徳太子のその事績が、『日本書紀』などの歴史史料だけでなく、聖徳太子の伝記・伝承が数多く残され、さらには、「絵伝」という形で描かれ、それを絵解きする、つまり絵について語るという形で「歴史」とされてきた結果でもあるといえます。

聖徳太子のイメージは、時代とともに変遷してきました。現代の私たちの中には、現代の感覚による聖徳太子イメージが形成されています。しかし、それは、今までに多くの聖徳太子の伝記が撰述され、それを描いた絵伝やその絵解きなどで語られ、その語りを文字化した書籍などが広く読まれることを通じて形成されてきた聖徳太子イメージを基盤とするものにほかなりません。

そこで、本展示では、聖徳太子イメージの基本を探るべく、四天王寺が所蔵する「六幅本」といわれる「聖徳太子絵伝」（遠江法橋筆・鎌倉時代・重要文化財）を取り上げ、この「聖徳太子絵伝」に描かれるいくつかの場面における聖徳太子のお姿を考察していきます。

描かれた聖徳太子のお姿は、「すごい太子」と、「愛され太子」に分けて考えることができると考えました。が、一見「愛され太子」と受け止められるお姿も、現代人の感覚を離れて、古い時代の価値観に即して考察すると、最終的には「すごい太子」になることが分かりました。

さらに、「すごい太子」イメージ以外の聖徳太子イメージもあるのではないかとという観点から、現代における聖徳太子イメージについても探ってみました。はたして、どのような聖徳太子のお姿が見えてくるのでしょうか。そして、「聖徳太子絵伝」は、聖徳太子の何を伝えたかったのかについても考えます。

本展示の注目ポイントは、奈良国立博物館からデジタルデータのご提供をいただき、ほぼ原寸大（少しだけ大きめ）に再現した六幅本の「聖徳太子絵伝」の展示です。普段は、博物館のガラス越しにしか見ることが出来ない「聖徳太子絵伝」の大画面を、複製ではありますが、高精度の再現画面で近づいて鑑賞していただけます。この大画面の絵伝をどのように読み解くのか、絵伝の見方も解説しています。

さらに、絵解きをお楽しみいただける日【2023年2月4日（土）を予定・午前の部は追って本学HPにてお知らせ予定。午後の部は、13:30より「たいし塾」として開講いたします（本学HPにて要申込）】も用意いたしております。

*奈良国立博物館よりの六幅本「聖徳太子絵伝」のデジタルデータの他に本展示の写真データや出陳資料の多くは例年に同じく、総本山四天王寺よりご提供いただきました。篤く御礼申し上げます。

遠江法橋筆「聖徳太子絵伝」
第二幅より「守屋との合戦」

